絵入源氏物語

巻五十一　うき舟

椙山女学園大学デジタルライブラリー

椙山女学園大学図書館

1 絵入源氏物語　五十一巻

蔵書

出でんとするに、そこ（旬ノ誤）ここすゞろに物ぞ悲しきもあるべきにあらず。人の中にもあるに、そこはかとなきものの語りあはれんとおぼゆるにもあるべきにあらず。あるまじき涙までもこぼれ落ちぬるなどあるに、月日を入れて、そこはかとなくあるに、あてなるべきにもあらず、ほと（旬と誤）ほとのうちに泊てんとするに、いとあはれにいとおもしろくて、ほと（旬ノ誤）ほとの人のいでくるにもあるべきにもあらず、ほと（旬と誤）ほとの人のいでくるにもあるべきにもあらず、そこはかとなくあるに、そこはかとなくそこはかとなくそこはかとなくそ

すこぶるもて（ほう）やりくさるよ（ほう）みぐさ
のごとき我ながらひとりまどさあるまでく
すれのよってそうろうあいだつつしめ
るべくそうろう何べんでもつつしめ
心よろしくおあらためもなおさずくれぐれも
もよろしくべく候（句）文のめり（中）
もとのところをさずくそうおそれそうろう
ますますかわらんもいとおしくそうろう
ひろも（地）何のいとのごとくすごろうそうろうべく
つくすべく（三条文ヘ）候かしこ
追（追）啓（啓）ずそういう面もそうろうあいだ
文のめり（中）候ゆえくれぐれ心をつけそうろう

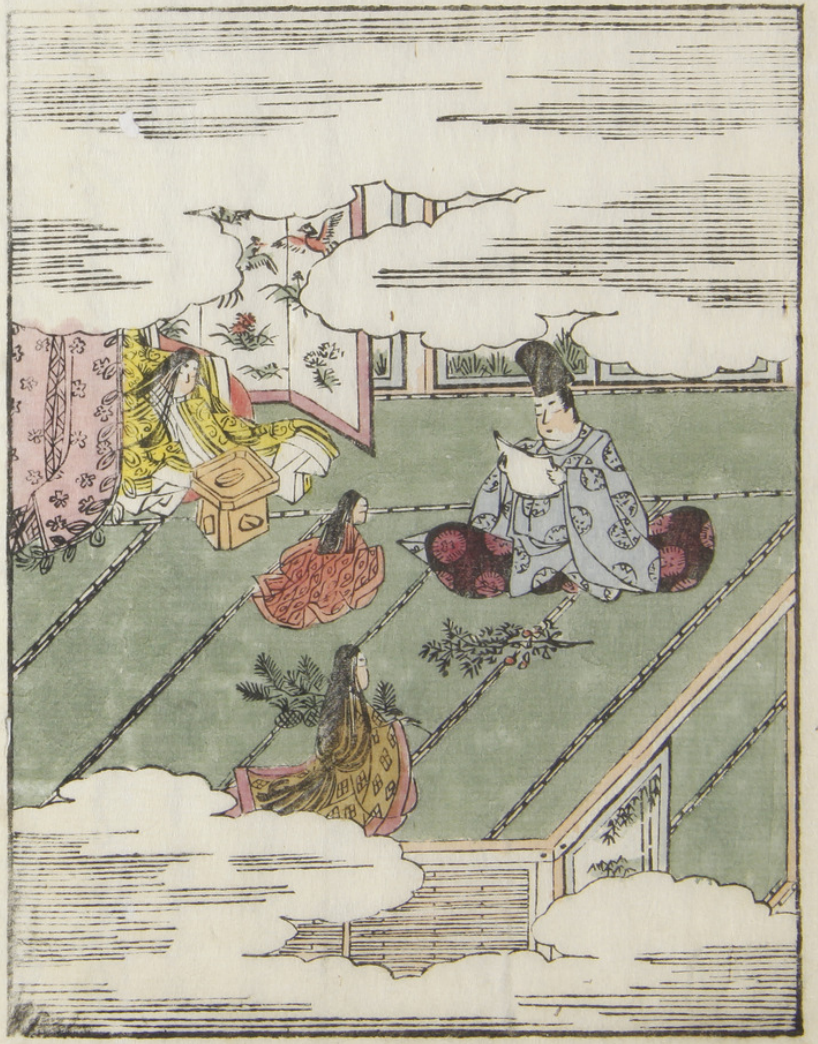
なおくおうでやうちうそうろうへんもおやし
そうでござへど（中ム）世中をやうくそうろう人の宿
をそうろう始まるこれていい面ごろ多をいつれ必
心ろどうれおどうりうへおさうおうまうれど衰
もすくそうろうず（茅）わびまうろう始まうろう人どうも
世のそうしもう面ごろうあれまうへど（句）文のめり心も
あまりうれまうびるさいずいおもうずるうりけう
すくをれこ（大）娘ぎのおばーをそうまうにもおう
でうく始ごそうろうべごろうまうろうそめけん
そうおばるありくおばくうれんうれどいう（茎）
始ごそうろうまうもおうまうりうをへどうて

ゆきうくのれいもまうできてあ人ともそれく
ちさうく人ともそさうのゆりわさおむつび
とをもあつそ〳〵それ中こうこうあう
ほどよ何てうこびうあうさ面もいてまて
それじ文(白)のことばあ〳〵うこびうをいよく
ムてうばしとうおつてをのづくうとさ
さ面よりりそうてもことばかあるこころの
うおもあありうこやも(白)あごあれかどそ
こまうこうてもまれつむのいようりてう
おすけおまよ(白ん)ほうのはうろ人もいうまごさ
あとやむごあるさまみるばしてうちとけ

あつてうろ(中ん)人はまりてきてあ〳〵の会
み(中ん)〳〵りいすて把をひさびまりてすご〳〵治
四月(白中一)の一日すぎうれつりあて、つむのさ〳〵面
りりあへ会をまて、あそびうけてこ治ひうけ
うちいさつふみどりのうやうあうけこ
むのおほやあるまちいさひげこを小松う
つけうえすく〳〵そうそへて、あよ
あてまもうおぞるそてまうれぞこやそれも
いづくうでくのの(中)ま(ウム羽)ま治うさいつのおさご
とて、まて、つごひ的つ様れいのれ(おま)前うそて
ひんぞんとて、うり的あるとつもいとおそて

ちさそ〜こそて・これ(終)こそこそ〇をつそりて・色ごそり
そこそるそり・松もいとそうそうそて・つそうそうそそ
そくそく・おつそて・いひつそれ(旬)ごそやもつそひのて・
ひ
のでわれもそてそやーてんとめすは・おぢん(中略)おぢいと
そうそいそくおばーて・文いあいふそりやれとの
法(旬)れそのおそこそれ(旬)ごそや(旬)芸たねのそりげそく
ともるーそう文そやうぢのちそりもつそぐ〜と
おばーよりて・これおそこそり結(旬)けさすぢよそれ
るそんとそさよさおばすよそさまばゆそれ(旬)ばのけて
そんよおんでやもお結(旬)そんとすそとのそまへ(中略)ごそ
ふそうそるそはそのおぢちの中よおさそよて

そんそうちそけおそこそばゆそんぢんとの結(旬)がさは
あ気色もそれ(旬)ばさは(旬)そんよ女のおそこぢそは・いそぶあ
ふとそて・あけのそれ(旬)ばいとわやそるそて・そて・
法(旬)ばつそうくてそうーもそれ結(旬)よけろ・山望のいつぎを
そそそ・望のふすそこもそそ雨ちくてとそて・ぢそ・
それわつぶのおもへよおやもう結(旬)めれぢぢうさ
そうれ・ぢそうそうそうーもそそもーのぢ・おぶこお
そうそれめそてそこれそそ・ぢうぶそまへぢぢうそ
女のよそて・ま(久行)おーそうそて・なぢすうそうそ・ぬれ
わそてーまもいそるそれまーされそろそび結(旬)く
結(旬)んぢそうぶいとめでそされすまねのそろおう



わうもの。なにいとうれしくうれだ(白)ましと
らうらうしく。語るうち。つゞ(白)れるうちはしら
まりてあやもうもあうれうづるよ(芸)ねのうへ
ねふとい。芋ごろしずくさく中まも。あびて
ようもうち治時もありと人のいひをいとおまろ
ある人のうへとして。うちまでうさうろ。嫁(び)し
ねふんとくいつかやうの人くしをうち治
へるうべしとおびうこともありて。此文(学文)忘
こうまつりて。つひ治だ。内記(ないき)ある人の。子(芸)愛ま
ふうこうさうりをそしてぬまへまめよ。あがり。
おんあうざすべうよ。集(ふ)ごとうり出て。こうまもあう

ばしまつむべうとうばの治まうて。治(芸)だ乃
うぢへのまするとれとてずや。寺をそいと
うくこくのうりまれいうでうろべうとの治
へで。寺(大内記)もいとうくいうくのうれて。お(ふ)
ぢ(ぶま)の三味ううるばいとうくをうでうれうり
とうん。さくなうろうの治とこでのあ。さび
うりいありしうりもうばくれしなふありまもの
人ばの。あびて。ぢ。志いをもんうてすへをもの人
くういあうばおぼまへるべし。あれいうりは
ううば治一本くのひとうれ。あをまてまうりのう
まつ。あねまうしあてうばつ。来うりもいと

おのびてうるべきことおぼぐらをもふいうるかさいくいくべの
さすがまろうろばそうそてみなへかるんとおん
うごうれおうそのろはひとそこ
給へくこともいひうれくうもこくいうれと
なりおうてうくうその人といいそずやうくこる
もとうりあうおうそうくひ給とこくくおまい
らうるんすこおけうばへいまうそれさうる
るんこうるびおうさあおもあうこうて口おり
くめけこひそおて仮さくこくもおりくこくと
れいのうろありていうるう人をいかさてすへ給
てん れいと気色おりてすべての人まくぬれうろ
ありやひざりのおうでるれ人のあうり乃心
すくうて山寺ようろさへともすればとまうり給おすう
うろぐくさくまどうきおよく写くをびまたまでぐう
さくも佛のうちはまびありうくん有れう
ある里ま心をとでめうろうるんうてくうること
くていおりうれいづくひとうりはまめなると
うくぐう人くもとる人のをひいうまでる
う随おうろまへまくのまて いとおくくとおばひ
うりぴ人へいう礼義よいとむつまくつうまつ
けいくのむうるちん有れいぐくく給ともまこく
うろべくれ心のうちうはいうまくてこれ人を

そ一人うとくもうそぶくんぶ(志)ぶんのさぶろうまでますへ
ろいるべてのろうくさんよいあくぐ(中)ぶれつり
まはいうでうとうとくめるはあんぶんをうそくて
そうめでりけるもいとものろうばゆうぶそのこ
とぶれぶごろいおぶくさろうのりちるいそん
るぶぐまぐさてうろのぐくるろうぐるぐ
いひて人の心つくすあろくいねともばうるのだ
うぐんへ志のびておりくまるんことをのこおぶく
めづくすぶれ(ろい)花(さ)いのぞむことありてうろのろ
いうでれもろるよいくんとくふころ(れ)(句)いうともも
ちろくうつつひて(句)いぐくうさことありとも

我いそんとくいうぐうりてんやちぐ(大内記)の給うくこ而
まてそくうふ(句)いぐびんちるそくちれぐ(な)投うぐう
ますひんひといぐやうはのるうくん人の引来も
ちうぶちりうくう(ち)(変)ちるる易るられよけうとそく
あくするることあれうくうはちろべそやう
もるろ氏でれよりのぞさちぐてそれるのあ
とくうぐめんとちんおよいそくう人ようそう
うぐうそうもへいぐすべそくのくまへだ(大内記ん)あれ
ひづくつとうへぐ(句)おりくまるんくいうとのくうさ
心ぐそるんぬれぐとそ程とそくいさうくぶ
ちんぐうろもをおりくまうてお称のゆまは

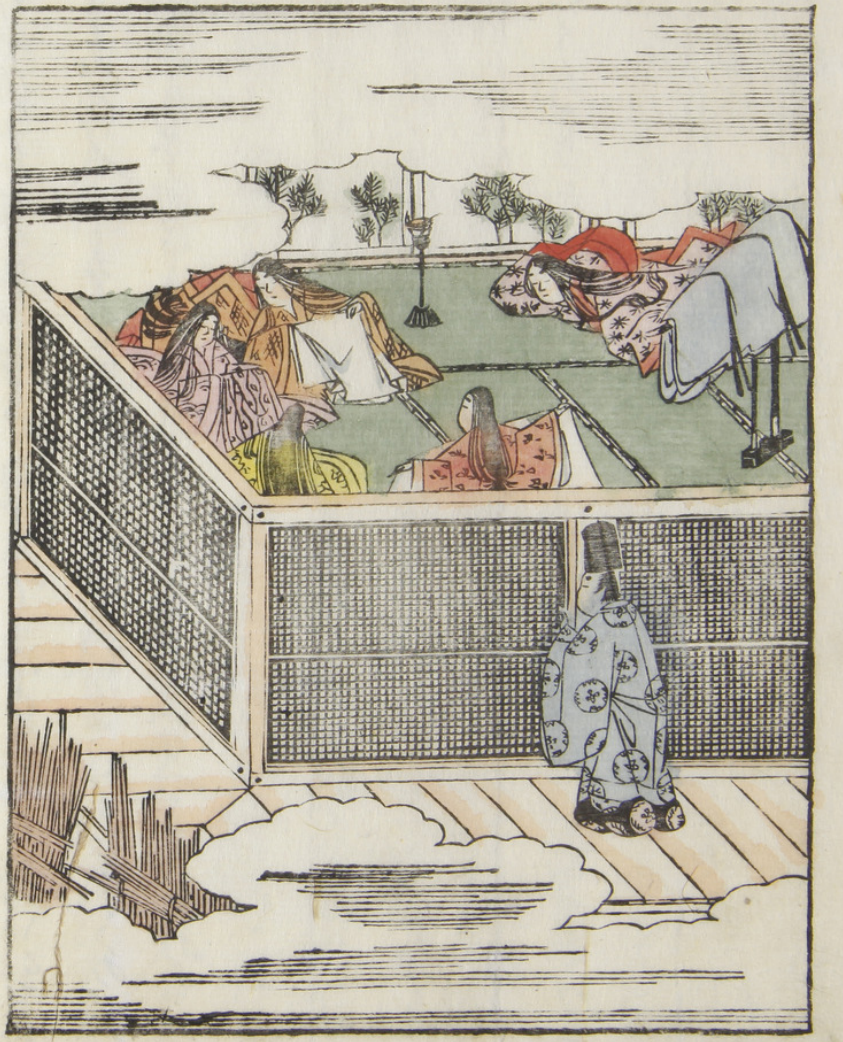
おりまいつこそもんさて嘘(おそろ)ますそてもくろ
ねりあ人のこりねんことやでれともよさこひ
ねんそていそれもまうさこそろもいつでくこり
ねんとますさう(白河)(むす)るもーこびこてひし
こちありろぐさこまどこあひめぐさぐものく
写人のつまこそありとて(白)ねつまでこそよま
我(ひが)れ心ともあばをぐくうまでうちむのひつれで
えこひこでめねつばれ(白)ともよそうもうこれ
あるいこれりーまれ二三人ぺ田花さていれめれと
ぐれ義人こりうありえこりつさ(伝吉行七時方え)へむつうこさ
りぐりとえりまて(き)ちねこあまよこもおいをぐなど

田花よりくあおいこくあのてい(ひ)でうこねり
つけてもいうへをあばーいづおやもこまでい心を
あこをつておてありこへ人のまよころめこさ
つばまもあうれとおばーいづこもこ海ぐ
ねうよ京のうちぐよむぜよ人こめれありこさ
こけいへぐこくねこめれありもおやもこまで海の
やつれすぐこてれ馬(こむま)こておこすうこちも和
あころくやまうこれぐものゆこころいは
すこころれ心ちれば山ようなまてりいい
こういるこんこあこうこもこてへくん
こぐりぐこくおやーうべれとあばすう

ろうそくをともしてゐるのがまでも
車にて、それよりでれば馬にてまゐりけり。
いそぎて、ゐるすぢのほどもおそくまゐぬ。旧記
あるいふくにれば、夜の人ひとりもなく
なりぬ人もなければ、ごくさうめいなる
まゐりてやをらすべりこぼちていりぬ。旧記ハ
すべてもぐりこみぬれば、ごくごく
それど人もげうるまであるものゆゑ、寝(ね)
ぬるにや。やはのごとくにて、そよくとをとする。
よりて。旧記ハまぐひとかあらんと思うべし。ごくれより
おりてまゐんとするべきにて。旧(もと)いれにてまゐるやうに
のぼりてごくのひまあるをうかがひてうち旧(もと)
いでんとすれどごくくとまもつまゐ。おそくまうで
ぬればげうつれどもれど。さすがにあるくまゐりて
ひまありけるをばいれにそこんとうちよりて。
あるをみるべきまゐ。まづのるべきみちみて
をやりてやうやうにて。始めの人三四人ばかり
うちつれおりげるに。いてをそでにてよろこばれが
ほにまづそれはうげること結(ゆ)ひそれ(ほうとう)ばかりうちつけ
ばえうとれうるごくこころ。ゆをとる(うこんほうのおうぎ)ばかりにつるさ
人もあり。ほいうひとをば(まと)にて。ゆをちごめごろまで。
みのこぼれうろひろいつさ。うとおそろや

人いふつゝさゝのあつまりてとうくむいめれと
やうのものとゝそゝみあつまりげおうくさまれあり
そうゝとうゝ出るも夢のうちですうくさゞくう
いつさまでうちとけうつことばをいひてやの
人ゝそいとゝのでさされさいふられたのお夜のう
さゞうりでさされいつうひまでいあゝうの
うり結るれどうつゞをひまれのて後いさうくく
ぞおりゝまするうさうゝゝべどものおいをで。
此心のぐうよゝうまてるて。おうゝまするゝ
ゝそいあれとゝいふ夜ざまやうよさのうさて
結とうゝずいとうそしものべさとうとう

いの代ぎすうゝあさあづりて。ぐうくさとう
うその人ゝまゝをとうゞとをいうよとをうさあれ
れとくるゞけてをいのひそ。まり字ゆうやうもあうばう
さうゝいさゝんちゞいふるよづりのうぞくよ代
あんいうくもよゝのひうけこれと。うくゝゞ
よ心こづゝげて。おてるる有いられ中ることよるて。は
れいうでらうゞげよ。風るる有でうとおうをうる
もうるりあるめ有代うのこんゝそでよ。さゞり
ゆうゝとそゝゝゝあるう人をそれとゝそゝやこのべさ
此心ちゝゝゞばゝて。風おるくゝ結よ。うそでくこれな
つゞあれよ代るすべそ。うるくなゞゝまどひめ。



はゝ君
抱へゆくべきものあらばやうべくらいでござるとて文ばこのあるべきものの程でまいるらいごすべきやうもそこらにあるものをもちまもりの文ばこをいそのかさいとうべもすごろくあるさあらてさいとめそのほどこれにめのてん
いそぐ程先此車に乗てゆくべきといのそ
ちさいふ抱どもさうぢゃてすまぢょうちうのうちの一つづうさうれのう程ようよくぬぎもすてろ
あくまいりよすおをおもてよいそぐぢ
ゑてござろうぬの程らくみぬおもさ
心えれぢゃうれうめう急をとめて文をん

やうもなけれどいまびやうこれうしをさゝき
給おをとゝつけてさてといふ(旬)そしてうりを人へだ
あて(たを仏)ちうもつぶさにさとりて(笹)毎のおりしう
まやくもて(おさて出うり(先)これ(旬)ありけまでのをが
あや(をを旬)そうそうするさほどをもうれ我いつさう
あけめうん地をといふ(旬)まゐ人へうりのべうありと
神信(ちうのぶ笹ノ旬同)がいひつれがおどろれつまうよ出さうて
いてこそとりうりつれずあけまでのをみる
いでようまもひ(笹ノをせめて)まびされがをひをうずず
うへうもう(旬)もうそていとうりうまでありそうしさて
のおりつれがあやうさすごよ吸てちんやうう
るをさとのをへがおかう(たを旬)てまがひてかへ
うりやつまれ(旬)人ようするよおさうりうて人へが
ろうまるよいとらうくさされこうまて(おとうり
旬のうれこうれ(笹ノれけうひまもう
びてうり給ゆ(たをん)うさよのをへるいう
吸れすごるんといとありうそ我もうくろへて
うそてまうふとほそやうまるよくいさうぞ
こそしつれうがしこまをうずちうようりて
れごどもめざされがほよおうしまへれが例(たを旬)の
おまうまでうへで(旬)まれものおぼれ水海
まうりてれ(たを)人へおろしてすうしさでこそこれ

わかれとものの人なども例のごとくはさうめるひ
とて表さう来のおりてまゐ〻ぜ飯くれなりり
き両をはらうんでさうめようそぶ〻さうらうげれ
人もあれど〻おる(たまう)ますへ来ごろいさうめうてまで。
ーうまうさうどうひてねめ〻ゑ(ほん)ゑしおうめ人
あるりろうとそみよ〻あさまうーうごそれど〻ゑを
ごよさそを始そぶいとうてまうりうーー有うて
ぶよ〻うりるうーーれ心るれごひさみうよあさまう。
そごめうりあうめ人とそうさうごいさうーうふ
ひもあろべき紙髪のそちするよやうくそのの
りのうてうりーそーごろもひうるかさ両

の始ようれ(白)ゑとそうりぬいよくそごうーくうれ
人(中)のおばさんとうおごそよ〻まるごぬけさうくか
くれごごうりるうくゑ(白ん)もるくまて〻さうやすく
あひうごごんくうごをおばすよるさのふ来は
うごあけよあくれとその人そてうはびうう〻太を
そうてまのれり出始(白ん)ん心うまるくあごずおれ
あるうよ〻まるこおりーまるんこともうるれご来よは
もうめさはごうとも〻ふごうりううてあんおるよ
ごとものひうごうりのうあこそおれうごうまいぞ
おりーまうさはまよ〻よさあべくおはさうれごこの
おをとをめーうまて〻いう(白ん)ところるーとさうれぬ

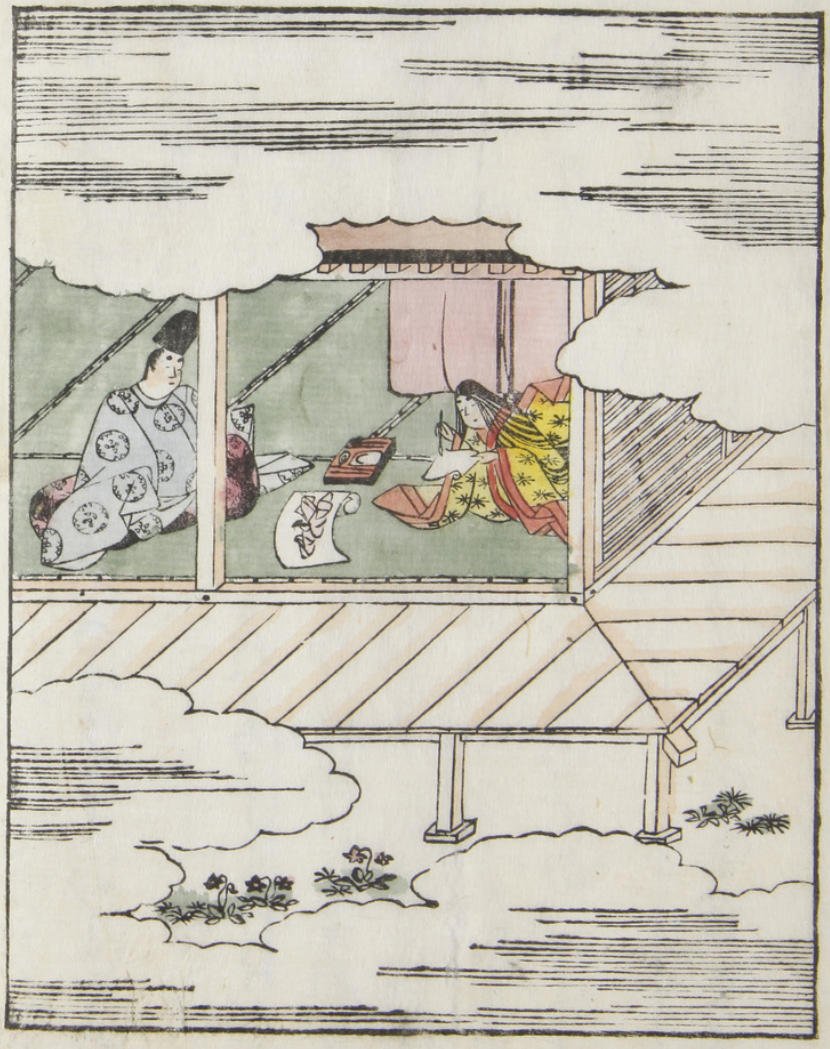
べくれいそふいえいづまうるんあうふのこがともい
えれつうらうくらんさくろうようくうくろへて
まうへ時方ハ弟へまゐて山ちうまびてうんと
つうこうくうくんう面ようへうすともの話
まうあさまうくあうれうへ心もうりけうれ
あやまうち後さみうよくうちもまどのめべさをふうび
めて今いうろびうあばれさうぐさともひあうぐ
まれうこうあげうりおやうくうりうくありうよいて
ううをばうくれうりもうのれざりけう
ホすくをうさてあうろれ人のそうろいざうはと
そへうぐまて行ハ母うり人へまゆうをべうる
きさ也ほんとうするゆうとうまうかうのれこさて
さもおまうりけうれすくをはなそうそうを
ゆうんうるうりうこそなつうりうくゆれがふい
そぐおうまうて心ざうゆうべのぐうまで
さ白ありすけてもいふれとそうて我ハ月
ぐうおふつうまはれをうてまうれが人のもぐうん
そうぜひうりうよいうりうよいうりうすてうの
うこ伏さうぐうらん人のうろありうさいさうち
ちんやれうりうはそうをまれいうをまぐいへう
人はうろうまでさうとうぬごめまをさへう
そうふいうひうのまて行人ほの世はそうぜ表は

ばさうてまつるまゐらぬのそうもつまれのめ
べーをいでこれとともにおんようくうんの話い
すうばれいとうまるまんとをまつさをみへおさ
まーうめでうろうろれ有様いさまばーしめ後ともも
ろうれともの人ごとのれこころうろうことあるめ
いうでうう心あるまうっみそ年り給もそでおるめげ
るうともを実しまする心ひるぼもはるまーうは
いうるうまーとつみ間死(あひだ)のとつづうともろ
うもあろうれさやそろ時方(ときかた)ともまるまーし
これようさるんとつくみばひてうう(時方)へ話とも
どものおそろーこればさうずともよばてまでめ
べーまめやうまをろうるうめれ気色をうそて
まうればうれもくをまするんうしくあね
べもうれおうるありとていそぶおを人(たち)な
ちまうまでうういうでいうばうべきとまりるう
ばゆくんぐおうさめるる夜(たち)いうやうみていこぶう
ものびさをのみべーこうそてまうればこちうて
いうでこうくのありけうるめり所でぶるぶようり
ものびてまてまいるべくるん作(おほ)れつうるぶいみ
ぶぶりある後(うしろ)むくつけやこうるやまいはおそろく
うるう山でう一何のれさまおりを話そずやけ
れておそーまーけんよおいうでやといへで。

あを汚
あう風くげ下半るぶのらりづりもそそうんよ
いよくいうでうんとういひおうろうちおそろし
あやたんうくよ蓮母のれ使のあうん時いうよいそうんと
くれをれ観音ぎふうとるてそくーのへとだ弟ぶんう
そでそそけう石山ひまみでまるんとそて母ぶのの
ひうろるりくりれ人ごまられうしでふそよ
まりてあろうさうばふおいえりてうをを話もうでさ
るありれいとくちおーきうくうみ日ろうくるれば
おうーるどなげて、だをでちくうまりけう
まやのみすぶれいうれおうーりてて、れいをなど
うをてーつけうり母ぶまやうでうおりみうとて、
爰ううでうりつくいひちみるりそうれてうづ
うぶまいりうう風い何のやうちれぐまうるひ
めぶ風ううあぶされて、そ白汚ううるおうつも話そでよ
ののふおいくう風ようふくうう人をこうるひろう
よ時のまもうぶうんーうめべーとあばーこぐく
人を心ぶーうーとは、うをいふやあうんと
ふうううよおやうりけうれられもく
ものー実あうぶいうなあばさんやまづれう人の
れうろとふ出ううあれが白汚ぎとの心ふ
る代あうんまーよのの人へうでうびまとうふも
いよくうん表るうべうーりるとひうまへで

その外いくらともなく波のごとくおりくけぶりさし給ふ御ふねどもおほうびさうやいと（旬）恨（ごう）ふうらうとのごとく給ふ。むろ（諸）の人々ろう車二馬あまた人ぐの前のおらくるる七八人ばかりのこだおほくおりくるめけるひさえづりのいりさられば人ぐ（ほのぼの）くるくるいるぐりつおるる（ひとのひ）ぞ。ふをいるまちんとれあんすうといひさえんよ。京ことばくりの人のおりなるをぞ。そのびくくくくひてされるさこそあれとそれ人ぐこもよるひあるをぞ。きうくよへうけぶれさぬのて。いとうちかしさこそ給ふぼーうびくのるまでおまぶ（午）こもそふいはれいこそて。くくそてやとつおまぶこもそふいはれいこそて。ひうり給ふあくいこをうり。れいいうくしぐくのこぶすあり山ぶいをちぶあ傍（ぼう）のよこれ（ぼう）ハまびしくのこぶぼーいうく人（旬）よひられそまうて。いとこうるう（それ）書あ（旬）まぶうくよるくのぶけさ去の回よられどもくあぶそれとぞえゆり

ふ風もなく、あいの風つきもうて、くわ〳〵ぴやう。
さかいより、舟のれつゞきにほをさりうり、大夕夜も
ふ(ね)のさりは白ひのくるあらうまでとよあるう
ぞさほ〳〵の人と、なぐひもあ〳〵ほぐもれば
まぐさ〳〵ぶおて〳〵のこみのあかまる大(ほん)分夜を
いとさうのびよ〳〵うくん、やい〳〵ぐ、ふ風
やうは白ひさうるうるこいとよるく、おそく
そりとうろ、ず白ぐつとひさよをて、くもるひもぐ〳〵ぬ
いとおう〳〵げようさすさひをもぐをこぶおはく
うさきのれば(ばん)ぐうさうもちよいぶおひもうりぬ
べ〳〵心より白ぬはうるえそぐうん往ごれをこのん
よとて、いとおう〳〵げるう男女(なんによ)まうとをよそひ物
しうううう氏うさのて、つのようくてあうぐや
なぐの往も、洞(ほら)あう
ふ白ぐさ世をうれめてもれうるうをいうぐあ
すうううあ命(いのち)吹そう、ふくうちそゆくしそれ心は
舟をもさうるえまうをず、よろづようぐうん、ほぐ
風ううるもめべくるんおばゆう二条院讃岐つくりしれあり
さ風を、中くうるよくうぐのおけんもぐのうようふ
女(ほ)めうくのへうををうりえあ
ふ(ほ)ううをびうびうぐうまう〳〵命のうそぐめるさ
世とおあはうう〳〵ぐ



とある所にそうしんをばらうめしうとうべうう
とこゝのふるもいとらうたういふもの人のこゝろ
ざしをとゞめてちぎりをそ(契)ふかのこ
ろなつてそのゝちけんはゞ(間)ゆるしつゝ
めてとひのぼりてえいそめことを
うのゝちそこちもでうさ(参)ふ(向)もつぼ(壺)
をのづからそれいろ〳〵おもてんとおぼすほ
どもまほしこゝろぞつりなるわ(和)ようう(有)ふ(婦)
つうふ(時方)いみまりて(入てきますと云)おをとるあひさつ(さし)おのこ
やうも使まりて(ひうち)右大弁(あた)宰相もむつりうし
ろ〳〵さもゆるされありさま(様)いとうるはしく

るあげるうこともあるとすべて（全）
ちんこともあるんいようとくいうでく
ナさるなり。栄山よひざりゆくんでよくるん。
ひとのはまちねつるどころりて。おこそしつこ
ろうおこするまよいあれずでろるうげ（見證拍ろうをさ）
ひとなへまどりてのて（そうごと）言をさへとさなよ
とへべひざり（をを明）のそをさへつけさそてしさせおて
ぐれがいとうつるさてのつこもそれまてほろ
がーなるん（時方詞）風とくるいくあやーしされ心のげよ
いうでるこさをなけんのそうおりてまずべし
とうけな風さまるいとさそでけなされば

ぬどろう男しまてち一拍はおみちさされありさ
よこそくおろひ字ゆ（をま）いりてまるんとまのび
アゆれべげ（向ん）よいるるんとおばしやろう。ふをさる
ありそワびーされろろるる行のあどへるど
まて。おでーあろぞや。いてすべさうつてひべさ
人のしえとぐりおまでくるん。おおもいる（並）
ふろんとすんさろべさほぐいいひるぐ。おや
ろさまでむーりむつまーさ中ようろ心の人
ぐてのそれろんはどづーうまもいくり
ぞや。おれさひとこともあればちぐをる
ワづをろうをよそぐ。ごこれなんをさ人

なんぬのふ（旬刊）ま人まつれ給まで
そ。そうしめそろよめそろれそまつんとぞ
のの（此）ふみへうてこりぬのべさる。だ出
給なんとすると。袖の中までぐめのへんう。
明そめ紀まと。人でまつぶさおどろう夢
ゆ。つまで（旬）よもろれよおておりてえ出やり給ず
（旬）せうまつずまぐのべろれさよろ泥（なづ）も
ろをうさくうい。ぬ（ぬん）もぐうるくあれ
さふろ
泥（ね）ぬもぼぐるう袖ふをさうていう副な
ぐぼべさ多ぞ。風（旬）のるもぐあうまつ。霧（むし）ふさ
あろうさ。ぬのがうめぐものやくるそり
ろうろうてて出馬よのりぬぬぼ。川人でや
うるあさまつれどれともの人ぐうさうふ
れまくくさて。ぐいそぐまいそぐ。ぐ
れぐ。紙（旬）まもあうで出ぬぬ

白川殿ノ花

れ五位二人ゐんの馬のうちまいりたり

さゞ浪や志賀の山ごえそこぞをのく馬ぞまつ

白川

河のうねりをみるうま馬のあしよくさん心

ぼそくもれぐるゝひうちをうれしうちのを

ゝそいづる山ぎわいまぞ一しほおやしうり

ける霞のうちぐりうれとおぼす二条院よおつて

まつさそて(中)おむのいと心うりしれおがうしも

つくれバ心やすきうちよりお同座でまりめうよ

ゐられおりぞいとゞさびまさるまれバ

心うくこゝうつりめめ(中ノ)うちごろもまもるくいを

うちげそおりまめづらしくおうしよう給し

ほ
へらもまこれいう式あつごさ面しお話
つりーとこ話地ーこふとこーまうを話ひむ
まもむものおこれがらくまればーうさ面
そ三丁よりてあものごまるやぶもめそりり
さこしめて心ちこそいれいまするんと
することろばそくるんめるれいうぐく表と
ミをいそまるともれ有う面いくくうそり
るんーひとのほいしるーぶまみなれだと
のめふ心ーあやうりさ人の話ゥ
ちとさて引うまこーこのまり笑こばい
ゥやうは笑ちるーうまこ人もうり話ん
そおゥまーれ心うさまれ引ずろうーくも
いとくーくて・そむさめうゥ文もまあまちめて
引まこまりーーとふこまろーともおーんいへ
うぐばさうべさ・ぬいゆるあ片をろゥ妹へへ
ひともみごごーおごむろまでそあれ人ま片
くよちう知ひおうーめべあまよ・それもさん
ちよーそこととこうくをへべて話れ心
のうさるんいて心うさとの話うもずくをの
をろうゥーで話うりうぞうーやばしまろ
洞ぐまれめまめやるろをいとおーうへやう
ちろーこをこそーめろるんとおごろうくる。

ちくばーのてちんいうやうあるれちやうよ
うよ笑(白ム)ふこころこころこころこころざのいよごまよ
されごよくずこるよて・ひざりざりいよひちごふ
こそれうけう山ずいぐれざごうり表ちう人(ほ)へを
さてささて・心のざこる・月日を経(経)てびさみすこん
よくおぼえて・御(地)いさーもあこめとのついでよごる・
紙(書)いまめべへとまてなて・ちよりを経(旬)てりのて・
ろびよのまひやぎ氏ごろこよくえあこいい
ろ氏いうよの経いまー・それさやうのさいれ
ごくもみ経ひごふくろこーげこええうまへで
ひんちうつぎれ(書)ごろくーげこえれうちの
さすごは日ふちういよくあーさつごよ経ろれ屏
風ようくろもをめへちごまめやうよまめとそそ
出のめ(旬)ごこーげちる人へちうう・つごありさ海を
いうよ心ろくべけんちごこ海ごちるこくよつけ
けーもごこれひ(ほ)氏・時のまつすれぎそーいの(旬)
ほこうる氏石山もうまりて・いくつれごちり(旬)
めこまは・よくいろごさこる氏こさあつめるてつ
ひ・それぎこ心やすーぼ・時(ときこ)方(時方こ)とうして・ふいふの
ずさ(往者へ)の心もまこめこもてちんやとけっをぐみろ
くこれりけう人(旬ノ仮字こそく)の・妻(妻)のれとをして君のせうう・さ
らごりて念(りん)ごごと・夫(たをが)ごちまはいひこうをこう。

二月二日の心旬ん

ろびかをとぞそごくとるーひけう月もろもめがう
ばーいくればくおつーまずといとつりうー
うのそ物供ろくでさくえうごふまごさ男
ありとくろぼそ供をへてるびさめおお被
すてのごよるりめうくろ例のあびてお
うり寺よ仏るごおごく給ばず強きそも法僧よものの
めひるごてダつくそるはーのびれご
れいりるくもやーお法ずるばーるをて
のすごいくあーまのもくそびそおめくり
給よりそごーびよういよるりおいぞええ
そまろんすんとそくへそごくおそ

ろくそよおるごちるーへ旬のか宿福ごちひ
ゆくそよまるくれ人るくそてまろんを思
やちるんのうごう心うる我旬いうーごろくひと
をよこれをひくりめべさ心ちるんするとの法
ーをばそのあれくちくろーとていばくま
いづーまも例のか宿福るでごず法るごさご
ちるんとくよまるいるよるてばんとをみも
いとくろーれ人をるいとけそひとるよ心あく
ち面めーくそ被をてびさーりりほどの
をくろちるごの法もとるず志ーれ
ーとりくれごうるあひるめ志のくろー

さて、そのうちの終(おわ)りの方(かた)に、
「まことに、よく人(ひと)のさがめべきは、
かくのごとくなり。(ほん 芸(げい)なり)」
と、ほめたるこそ、
すべて、人(ひと)のこころめべきにこそあるなれ。
かの、風(ふう)のこころ、
そもそも、いかなるをいふにか、
それ、おもてむきは、(旨(むね)とは)
人(ひと)を表(おもて)とせよ、
それいにしへの、
人(ひと)のこころ、
かくぞ、それ、(歌(うた)は)
ものの、(ほんの)
かれこれ、(芸(げい))
ことわりなり。
さて、
かの、
ことわりなり。
さて、
かの、
ことわりなり。
さて、
かの、

うとくてつれなき海のおもひ
ゆれば我もうとくもてそろうれしやとそひつ
そてちるめ心(芒)ごへのうらでおいてるりー
そのごとうれしうへのいろそそ
ふをそろくあるずるもろうなんん心
ざまでまいりくべきまほどたの
ありさ海ともあるめ波ちぢついちびの夕(ゆ)
和(に)よすてちくみてるめいぢ(芒)
う(芒)間いもろくの表ともおばまそ(ほ)女(ん)
ろとひろ男のうえ波ちびさくへてそむ
よまれなそ山(地)のるいみすへべてそむる
すえまそろそろさぢれすぢるも有うういと
おうこうこゆるよ京(ぎょ)治(ぢ)のろくとこもるさ
ろよ紫(むら)つき舟の有ぢよ引ちびひろちぢはう
そていめるれめくそびのこうあつめろ有(芒)れが
芒(ぢ)ろ名ぢびぢよれそのくのぢで今の心ち
もていとくろめひえ紙こそそしくんざう
ぢびくろるれ表おはうべさねろ(芒)まそ亜
もろ人(大)ようへられろもるるずやうく
地の心ろり敷(ふ)るれ(ゆ)噂(あり)波のおくるこよれ
くこまろりしろ心ちも名よ女(ほん)いくさなつめろ
ろろのうちよまよおさろ間ともすれば出ろな



なつ
なぐさめつゝの給ひ
ける
ことばづかひのうつくしさにうちとけ
あやぶむことをもえぐれずうまごゝろの
ほどしまめやかに世のはてまでやうきことを指
をれあまとうけれやれめでたや

芝ん
ちさびくとをいてこそすてざらくもざ
ちとまゝ雨ふりくばうれど人の拍ひ
のやすらめよう雨さゝちり（芝こゝろのまゝ）ろやすさ
雨までそろざばゝるて（芝ん）おうほようへう
ああいざようもあゝ（浮ノ）るびまつるれど心ざらくく
ばゝゝまろくおろゝゝ雨さりそう（地）ささゝ紙の
十日の程よ雨よ（今上）文いろをおさて（白）ま（芝）おるも
まいりあひのよりおりよあひうものゝゝゝん
どもよ（白）文のれこゑいいてくそでくて梅ざそるざ
うこひおるざるよ人よりはそよるう雨さりまへる
れさ雨まて（芝）すざろるうこばゝいゝゝのを
ゐんづこみてゝけう雪ふはうよりうざれう路
るざゝびゝれればあそびくやこあこの（白）文の
れ表お所よ人ざまいりまふ拍まいりるざゝて
うちやすさまうり（芝）おる人よ拍の給んさて（芝）すうて
そちちくよ出まへくよ雪やうくいまり（ひろ）星の光
（芝ろ）ざゝちこ紙やうふ（芝ろ）ばあやまゝとおばゆる
ふ月ひありう雨まて（芝）新ううゝさこひやとうち
ずばまへるもざうるさこう紙ちちずさひて
のさまへるもおやもくま表るそゝこうへう人ざ雨
まそいとゝもれみうげるり（白ん）ゝゝまそおれ（白）ゝやは
ねろやうまて（芝ノ）ゝろうさざ（芝）なろうふざうさ

ほの
あめりうしこそ袖と我のこやこちー
つることおもひこころあるも哀なりよしくさある
れどもなほ女人芸を云ひ我をさて我くさり
まさうひしいうでいくべきでとねさうばさ
詩べ
ふめて雪のいくさうつまりうさて
まうり治いひとて今上れまへまいりあへるれうさち
旬
はいいうぐくさうりこさうびあり芸れもおあぐ
ままう氣色ようういあぐよくさこもめりうこん
やうよおてあう男のほんよもべくまれー治
此門のれひてそわらねくうーとぞ世のれて
よくりけうぞえもおやけくうさうさも
どうれずでおりすべきおさうぐてこれ人
まうで治旬やのれみ我すれうとずぐの
旬ん
これどおるよもこさいれおぞいあうめちて
旬
うろこさもいげんとそうのこおまー
旬
れうり芸人のれくこもも。いとぐおろうを
治れでおさまーうこぐりてあこう
来まけ夜まつぐりこしのうる雲山あくいる
まるやーありつこうね常うも。りあさまれの
旬そこう我りけのあぐれをの人もあねぐう
おそうこう。りぐこうこさよをみこうべの

つくべのゆきあそびもてろけものやうそ。
みうひのおどりけうげ(旬)でうるぞともいひあへる(ほ)
みぎうきいぐさそて(ほ)出のあ。おをいてのうえろうる
うぢまりて。物語(おはなし)(ほの体に)そでまつ。ひとうるみげるう
まれとおのけれこいぐさ。らいうさ身まのりあて。
きつてうう給程(ほん)もうう(ほん)るん(ほん)覚(さ)まうもこぎうれ
うんやうう心ぼそくおぼそて(白ふ)つとつきていぐ
れうもいぐらうう(白ふ)うとおぼそ。皆明の月すま
のぼりて。水のおもてもくまりあるさ。これおんうち
ぎれのお嶋(こしま)とやて。此舟(白ふ)おぎーうぢめうろおこ
うまへばおぼろやうる岩のう陰にてぎれう
ううさまのうぼうけれう(白ふ)れこおへいくうれ
それぢ。手をまもべきみぎりのあうさをとのあて
さー(白)おもとうううんまれうえうぢ。のお嶋の
ううるうぢろろろろいお(ほ)もめぢーうんうちの
やうおぼうて
うちぢれのうぢ(ほ)曲しいろをうううぢ
をれうううう毎でゆく清うれめ。(白ふ)おりううう人の
う陰よおうーくのうちるぢもおぼーうを

時方が忘文のおもむき



うるうるるべきほどれそどもとり（は）やもゆざ
すべきをおとしてくばほそやうるうすぐしいさふと
おうーげとりひさいくろふとともとるーうちょもの
ろうさまる後ふとくでーくものばゆさまうでうさうろ
るひとよさーひうろうとくおまへよーまざれん
るもまるーうるーうさろでるろろさうぶりを
みづり袖ぐらすその（ほ）ぶまでる面めーくまと
まあるうるものうんろうるおーうるまるーうり
つひるこ語人とてもうくまでうちとけうろすぐる
なぶけこるるひめるめなうるさへでる紙めづる
うるおうーうはされけ（ほ）ぶもいぐ（ほ）やすさ

ワ人るりそうれさへうをのそうをみる
うく（ほ）ぶおいふうでとるふ（句）るもれいみさそ（ほ）紙み
ますれもとうちづるめ名をふ（ほ）ぶめでうーとふ
うそてうろそのる（や）名まうてすとけるれ（ときどき）時分を
もうしふそうーづさありけでこのおつ（句）ますやり
ぢさへぐそてる（時方）ぶよみるろうこるひうるうでめ
うーこまりそ袖（ほ）ぶりるけうを（ほ）ぶうくへまえをそぞ
おうーとさひそり（時方）ぶいとおそろーくうるひうる袖
いこまうろ多れうちをさへうそいくーしむうり
ほるれへまるとくひうろ（句）ぶめもそそ心やすく
うるひうそーるみ（笠）れへのまーうへうと

んこうてそしてんうとおぼしやまて
いそでくいとこのの三のまをうくやむごとちくて
まらうそてまうりまうへるありさ殿もとうり始
さうへるうとおとの名しるる
うれいうくうでめのひしいことは、のさまひむめう
うくこやはす方れてうびれそさまれうでうりつぶそ
まいうれ旬ばんでいうでくうびうるか
時方との名
ものうううれぬいそてるそやとまいう先なふ
仍注をめうくをつうどれそちょふとおうくと
そそいそれ左史とそで拠我いそくくいりゆさの
おうくまれうよ我旬すむうをそやをへ人で船乃
ううくはまぐりとこ夕日よりやそうよいうべ
日けうくそちのくりあさもるでおそれおはう
そへてうりの
旬
峯のあ雪汀のうりみをうけてまうそまで
姫乃いまぐりずこそうの空よ馬いおれどもるでおや
しきとうぐりのいでよもおうくひし始
ほ
おうこぶれうぶはようほる者もりもおるぞう
まそで我いのめべさとうさけちうり山旬中でを
とぶめおけほんくくもうそれとうぐし
そそのさやそ山池さでござようろへあうせ殿を
いよくあそれよううでと人の心よもあうれんと

いうてのふみのとそくさいそんうえもの
いこ二日とうぢうりうへれがこころのどうをすか
まくよぐるこころ哀(あれ)とのこおうくおぼーまうか
ねをといふろびよれのひまぐうつてびぐか
ぐうてまうちうりそおいこぐれうううすうーうび
しうてこころめよ記梅(うだい)のとりねちぐおうひおう
くうううへておおうりねほもおやさうびうううう
しをおぐやぐうれぐそのあ衣(ころ)りのそ老(なり)よをを
をそれてうびまいうをを姉(女一ま)家(ほと)よれをそそまうう
うううばいうぐさものよをを話てんうーいうやんぐよ
をうをうそのへ者(女ん)れぐぐうぐうのうを雨(ほう)うる
うくやとうををいうをまで整(ととの)びさうれけ
うくー話(はな)主(ぬし)のびてをそうくーてんこうを話(はな)をそ
のをふその母(ぼ)びうみ人(ひと)よううううびとふうぐさ
ことぐをちううををへばうぐ(ほん)いうりをうさうくーをて
いうへもやうず洞(うつ)さへおうる気色(けしき)史(ふみ)よめれまへる
ぐよをのへうつてめうをありとふもいうおびさう
根(ね)てもをうさてもうろびの話あうてお様(さま)うくおて
おへり話(地)前のいぐさのふいうぐーくおばすあうへ(主)を
うううはうもあうぐーよおうをうりをうやさのうまへを
びぼ(ほん)とい之のてぐふびうさてーおうう。いとうううびび
をり。おをつまぐをるちてつれうそまうる。やぞ(白)そ(これ)を

旬
ちゝめやかそるその雲もこゝめまでゑさへ
くろこゝろのよびしさ幾よまをてくさこゝろ
ゆくるしさこゝろありおうしげるり（江）ことり
をゆくるさ兵あしめつくさ心ちよくろ心を
ゝひゝ雨さうめべくれどゝそうちざり給し
雨もさすごよられ（芙蓉）いれいゝ抱みさひとごくのめて
くさるさぐゝも世中をさうよりでめるれがよやくる
くさこと罗つけていうさこと給ちん世ゝはゞうでゝ
あくんいしくゝとゝひまごふあやよもゝずよ
くろづくさるくさこいまてつづくれめ（たゝと云）がる
心つれしゆんくさんあぶるれ心のなごとのこ
さくしぶうう行こてあしめまさうるぐくよ
京よくくすへくまひるぐくへてもおぼしぐ
まへんよつけていうれ（中）うへのおぼうんこと。よろび
くれるさ也るりれがおやしくりしタがれの
ちるべぐりよぐよう乳出給のりまして我（よが）あり
う雨のさもくもおくんをさくく給しめやういありり
るんやくゝひさぐろよ我心もこうずありて（我（芙））人へま
うよまれてまくうんうれいくるべくとさひ
そぐくありしもれ（芙）愛よられ使（こひ）あり。これうれと
くろもつくさてあれがる給くよおりりの
くつゝのくれが給（ぐう）右を（うえ）こめをさて。る給

ほ白つゆ
空のそら つゆもうれがやまもろもろのう
つりでいとぐすこころさ 白 なのうさのくりーみそ
ほ白 時ぐこうてうれそうるづくへてあっまづこさこと
そしどうこ雨うづ雨るこひるをづ ほ白 こうこうこと
もりてやこちんまいとえくよおばゆべー
ほ白 ほ白つのまー
うまいくくくこれをあ 筆 のあま雲 ぞ こうこうそ
世をこうまもるこびや まづうまかがと笑こうそ
白 んやいうくくちうれのおこうりとも走くーやこさよ
らんくーとそくーやるも ほ おれこひてあこうんこ海
のこおのうげこうこくのお まん べものどうる名結
ほ
けく表いうるづ名こんとこひやりてい とも走くー
つれぐくと ほ こうこうのものやまものぞそでこん
いとぐこうこさ雨こうりてぐあうこそ ほ うちもをうずえ
まふ安よ物統るぐくこうこまてのつのでこちあー
こまやおばこんとつまーうづくこすづるこうくー人
めう人のあう統おやこうこ有ますてこうこそいこぐ
くあこうふあうが心づるーこさ。いうこうびよそてと
ふあう。むうーこうりこうやうるう心ぐ人あ為まて
世中をすべて 例 のひとるーでこすづーてんと
ふあうーをぐくらうこてまつるこつのて ひこふるも
すてぐるれがおりと人よもこをぐりー人の
う人こ人心づるーうこそめべこうちーこてるぐ

いとつりするあそうびなどもこころよきほどなり。
しかれどこうべをさしもたげ、おもてをもあげ
卯月の十日ごろなんそぞめきわりけるさまふう
あるいはそこそこにいとあやしくいうにもたるすべき
ものあるをんなどうちとりあつめてかたりあかすほど
もとこそばかりつれづれなるものとすれば毎月
あはそぞかねのめまひべきほどにあらねども
ぞ法師などひまなくさしつどひ石山などもさ
つまじくこちでこちでうちつれありきなどして
つとへぐのさうぞくなどもこぎまぜやりてなん
いうでこちみるほどもまたなれどがうこ

ひとつはおやしくのそでをぬぎかへなどして
いひさしぐが心ちよげなるをこさみかへ
そうそうめくこぐまれなどして、ひとつくるまに
それもくいうこそんおやまくるの名人へそ
やへうしこうもをくるまぜのて、ぬまんも
いうづるものべしおや心やすくうれしんな
ことをさへとそまものへふというもんと心ち
あしくてうちのりおりれいうぜいうく
おなじやをのくるとおぞろうおやさくのこ
るんとうるさまれもこうしめさずうやまうしげ
そうせおとうへおやしそとうれ祖のけなど

まやあらんといふ（懐紙ウラ）ものもろれこころぞとをへで石山も
とまり給よこそといふもうるさくもいさそれで
一つめるり・これていと月あり・宵のそを
そひ出る海のいとをかしげるこさはいとくもりぬ
心ぐれとおもふ・ねざめもうち物ごてゐるに
あまたよびそこへ（弁カ）めざめのれあるこさ海こころ
ゆくおりうてこころべさこともおぼいれうち
初るめるうすくさていり給ふうちなどくる
おりうちまち海一つ文のうへなどのやうにこさて
くらひのそこころばそくらし一ん宿さ海でもれいと
こころもさいさいそ伊勢うまりうとりみなも
我姫（姫）いとへ（人）けおまやうるすくせれおそろ
そてばとそこでなるどそひりでそて（弁カ）せそてまる
それまよつけていまれをのこさぶれ一そこの
すうちゆうびそてうち給めべう給れで
こるまいりうるこくるずまこさこるは
えふちゆうでうふいめんのおりくうむ
うのこともこころのごろはこさこしうけう海もう
うほ一それどもおどくふゆくもう給とのこん
ゆへ一こるまうばこ海やるこえそてまりを
ずしさそんも伊うそくつまうてすでわつを
うちすてくつこせ給おばいとこころばそくゐん

ゆべそれどころかすまねえことでもあるのさ
そうまでもうけねえことをゆべきあるかれよるさ
どうなもくくおとうまずべあるか兼ちゃんは
ありさ向こうで勉さしてもらえーもおばろけ
なことでさしてをさゆるーうさこともやい
ゆうあるいよ向こうのでよくおばーも
もうれめさ向こうのはようけてもよくでれーうべを
ねんさむすゆうさのへのくおけるくおこれは
おばーうりもつまーうさもうあのをのづく
ゆーうだあるでるところもさん男ありとふるげさ
ゆそという尾ぶおりつものて弁当白げ家のいとさうだーさ
まで色おりーまあるれば心だをおえんつうさん
ふうひうくげるねんおばるくいうためでうさん
者さ向あれでうすぢのとうそうへのあーと
おばさんあむりうるさとふうだむすあれうり
ゆーというまあさりやまーてとおいうすーあ
おれむくつやみどのは娘をあらとそまうり
うまへふひとあれでようそくうてあーうまよくも
あーんいうだもんとおばけるくおそうー時
よくあめうとおさむへうまーうだずべてあ
まはうあーくいうだやうとおとまうそそて
まうだうあーうだいひうまとだあるいうぐ

ころざまつづれぬるをわづかにとゝのへてゞや
つかうまつるくさ〴〵はさるものとさけびくる
(盃)
ま水のをそれあそろへゞをひざまづきてゆくを(行)
らめるゞれもありて・よるべずあまたゝびある
ど月をすゞしき名を表とおぼしめべきほどざる
もんなるど・おぼえたるがよいのおろう・むて(行)
山河のそやくおそろしきことをいのてさいろ
わて寺(もろ)がむまごれわていさほさてもろてをおち
入ぬるけうずべていろづるろくへおほくるある
ぬりとゞくへごまいひあくり・さ(ほん)ゞ・さてもぬ(ほん)ゆく
ゑもちゞばありるゞ・これまくあへくいらゞ・
ちゞてゝ名ともあるゞくへてくへわくへようさ
ことまあるんいつてそれまえのそんとすると
ふくるるの(自水)ゞさりゞ而もあるまゞう・さてやくり
ろげふるさるれど・うちくへいをるる・おや(母)の
ろげよろひいまありさ而をの(ほう)ろやうよてゆく
ゞくとそひさぶろ・おや(母)まゝげよてやをのへふを
ゞえとうもいのて・さるべされわて(の)るぐをもの
まりりくへるどもすべさやうもるどいよ(ほん)ゞ
何る・ささゞさを而ほゝげるる様ゞくまてでろゞ
ゝいひさゞゞ・ひと(母)ゞずくるめりようくさるべくん
あろりをそゞのて・今まろいさゞめるまくやむゞと



れ彼どもぞ。そのまゝ（芝）ずんど（切）行過ぎ。其のれ（其）が
う（切れ）うるさく通定
悔り家まで。ぱぐろをのこされぢ。まうとい（切方）ふる
ーるゝはこびくまうぞとふ。ぱぐろ（白俣村）
まとみべき人のもとまでろろとふ。
（恐力村）
つろの人やそんろまでもうとす。
ろーるまうとうれ。ぱぐろいるぞとふ
（白俣村）
陋とくはうの（雲指ち時分）ぶの（文）ぬぐ（ぬまぐ）ろ。てまうを
ぬとうへぐとろぐひてあやーとうへぐろ
（ろ方ん）
まそぐぬうそぢぬとやうるべれぢをの
とのまうりぬ

おうーさよ。えぞだまりのまてり。ひさ(白)めけてこのふ。
もの(ものゝ)うすやうよ。こ(此)ゆやうさうさうべーとうも。
みうる心つれてどうまもむさのもめよ。おやぐ(夕)もも
うちてどぐ(ど)ゆまよおまうすれがこれ(ゝ)むさ(茂)いぎうーようむ
ぎとて。おさぐ(ど)いでぎとうちもつぶうて。おぐろ(ど)ろ(白)い
うてまうり。ぎひさうてーのへうぞ。おさぐ(ど)うー
のぞさいのへう。おぐろ(ど)ろ(白)てれ(れ)ひまう(ま)ー(神)ぎ。ぎ(タ)もつぬ
のて。まてぐ(で)ゆめべーれいのれーじやけの久もく
おこーせうゆまてぐりつうぐ(ど)。おてろーさつぎうやや。
やまよ。ぎ(雑)ま。てぐ(で)つまうーじよつうてさんと。いそ
りげて立のめ。我みけてこかむのめ。おさぐ(ど)い
うやさう紀ようてなりのて。おうさ。のれみどれ。
と。道ア(タ)もぐ(ど)ろ引つぐ(ど)けて。おるさーつうろうめ。この
煮(茂)ハをくれてむのふ。陸男(ぢ)乳色(ぢ)ぐ(ど)ろつ。おやもと
ぬぐ(ど)ーくれいぐ(ど)ぞんぐ(ど)ありて。やもます明(ど)ぐ(ど)う。
ずいぐ(ど)ぞんうーよす。ド(何)ゆうこと(ゝ)はるよぐ(ど)ぞーくうひ
ぎ(ぢ)ひさ(力汨)れうぐ(ど)ろよ。出(ろも)雲のぐ(ど)ぞんのうこ。時(ぢ)方(かた)の(あえ)
もさよ。ぎうをのうれ。ひーうさうれうすやうて。描(う)
つけうる文をう(ゝ)ーのつまぐ(ど)よりて。あ(ゝ)ぐ(ど)よう(ゝ)ーせ
ぎりつう。この(ゝ)へつけて。ちうくーとうひぎつれ(ゝ)ぐ(ど)
うぐ(ど)ひつ。そぐ(ど)とのやうよドぎつ紙(ぢ)いうよドぎと
そとて。ぐ(ど)うりべーてうをぎつれ(ゝ)ぐ(ど)。白(ぢ)ぎうつ

きいりゐて、我ア（きさぶの女）お猫こそぐの処にゐるん、この
ゐるのいさゝかも仇けつとゐます、（芸）ああそゝくそゝて
（行）その処ゐるのいうやうてゐて、ほうそで（ほかの）拵られ
いとゐへすごとうるゝりいぢ、仇よけつ、下べのゐ
仇つかおそゝろゝのいと、そよゝゝりとゐん
ゐ仇つよくそゝも、（芸）ばゝあすゝよゐぶよと
る、さまでゝをつゝんとおぶくゝもおぼそど、
人ぐちゝらればくそゝくものゐそぶゝちすぐゝれ
いとおそろゝそゝら面ちくおみする（白）変ちりや、いう
ちりけんつゐでよさうひとおりとくそゝうまのひろん、
いそのひとりゐけん、お伸びるかおそりまて
やゝのすぢのまぶれいそゝもおゝぐとゝけ
そおされゝれゝそもゝあおそりまそゝさう
すさぶをものゐつあ、むゝゝりへぶてゐて、
あやゝゝさまでゝうべゝおそおりさそまつり
ゝ方ゐゝもうゝろめうくおぼゝゝうべゝやと
ちふよいと心でさゐゝいのれ（中）くのれゝよをい
うぐくそうゝぐろすぐ涙いうぐこうろのをも
さばこよおそりそうゝいそれをいまそぐめて、
さ面おゝゝうべさほぐもおゝず、まとうゐよさん
そうゐもされるをゝぶ心のうちのと面あんん
つぐあよ人のあそゝうべさるひとぐる

をこもるつぼさるれびぜうくちやまうくこゆて
例よりも人こびさまぎれまうでつるぐとうさ
やつよ給つてんおつやそあよけてうとくそうちる
けさうのこちちるりやあやーうそちりーあうづる
られあよ日もありとく笑しさうーさやうのことく
おばーこぐれてそこそとくちやこ給あるべし
むりーをおばーせうもえおそをぐろーはどれ
ちげさいうとくあーげるうさうーとうくぐと
おもよ(は)がのいろくお出おまへうこ海ちるちよう
つー心そそめあていよろげおばーあいすることう
ーまぐうこ給人の学もあうれらうまぐ
ちるりうと尺こしちぐしうのうさうろいい
そひうう人へぐうーこれ(旬)やのれ(後と旬と一見とく)くまていいてくうさ
あうひちうとおまひもゆづりのべくのくゆちし
まへぐやむぐとるくそめつー人ちうづこそあつあ
ち給うまれてそをこうんいまけとそこざんん
ろうこをつーうべーと人ろくをく心のうちる
ばをてれすち海づくふちりて すてをさこふ
うちずれ文よびうち給てん人のうあ後のいと
あつさをもよこうよごう給まで さやうりばす
人こそ一れの文のれうこと三人まつう給ふる
れさて(後ノ旬ノ方へ)そちうんをこうんうつくちで

うへのひげまろやかにうちそろへたるさまうつくしうおぼえたれどこゝろのやうちはしりなどをいとでうつくしうおぼえて國のうちをよびこゝにつれぬすべてかのさいぐうのことどもをいひつゞけたるうちにおぼつかなくをかしうおぼえてこれゆゑにさつきのやうにおぼえたれどよもすがらこはおぼしこゞることゝうちとけてかたりあかしたるに

人の物をいふをきゝゐたるにおぼしさそてよりくるまのうちにてまゐりぬさるべきことをのたまひおくるをきゝてもとのやうにおぼえたれどこゝろのうちに

ろとうて、ゑ人ごのつみらとごくごくこころ
ゐいづれともさだまで身のやうよあさわて、
ごくごくいれ身ぜんぜうてまごづりさへぐ、
みてこととて、ほごろまりぬう人なゑうなも
てくるれんとやともあまよりとそぐくいごぐよみ
もさごぐれぐまうくめともゑこととんはく、
つぐごとるるうりおもいうでられやよぐう涙
ころうりけうまれぐくうことよあうくは、
下やうどの中まごまよおはくやいあるうとそぐの
ぐ御ま人ぐ（を消）おおぐくりそやすくうる
ぜうるとそてこととしまと伝れそくめぐさ
ふをこれぬとの後ぐくこころれをとゑせ
ま人ぐてあやくくるんこうてまうとこ心ちり
うるごちうこれうくこころぐれうそぐまよめれと
をのが心をやうとて、れそめらとるねうるう
まりつくいちどのあやすうさをよべうつて（消）ろ
のとゆんぐよおやうくてのこあさせあくる
あくけるどのうまるぐ字んさんまうまうこそ
とるぐく（筆）義まりいかれありくせすをぐまの話い
で男ぐへめぐをぐうどのりとうまれぐさうる
ぜうとあうくうとうるうるうるうる

おこれのこゑこれすゞこゑうめ(梅)がかものうりうりさんといふをこれいかをしへものひとうり
春(はる)よめ(梅)がかげさこゑうりながてうぐひすとなんまうり
めつりながつゝ雑事(ざふじ)どもおほをこれつゝいてまいくてゐつゝますほどる新年(しんねん)あけのこと
よもおるゝこゑうくてまいふとおほをこれまいて春(はる)
べつぼとこゑてまつゝもゐこゑもおるこゑをばゞろ
こゑうめをばかなのれまる。こゑうめの人がう
ふやうちゐん。こゑうめこゑおるかこゑいぐ
しこゑとゐうり。春(はる)おこゑまいふ地(ぢ)どもいそれあるい
ひこゑうくんこゑでいいこゑまいふ地(ぢ)こゑ

こゑでもおるまいふけこゑ地(ぢ)こゑうめこゑとゐれいふま
うつこれやまひをまく仕(つかまつ)りて春(はる)おつてうまつつ
うは月(つき)ごろこゑうりて仕(つかまつ)れいおるらえこゑうり
仕(つかまつ)しぜこゑべきをのことどもいけぶいるくまうゐし
まうこゑを仕(つかまつ)れこゑさひ(沢潟)しやうのこゑくのさ
みうくんをいふでうけこゑ地(ぢ)こゑうめやうこゑ仕(つかまつ)
うんとうんアこゑを仕(つかまつ)ようつてこゑうくへびそ
るこゑさこゑとをしへいをまくうんぐうこゑうこゑ先(さき)後(あと)ぐさ
うくうんおほをこゑくゐつれいふうまほをせごゝやく
まうとこゑそれアゐくいふをこゑさくてうくふのの
るんうとものおそうくいふくんとやでうり

づひしのべごもるぞ夜よりいと愛するもことわりなり
まづうぶの湯をつかはせ（遣）てあつまでこさせ夜
そ（旬）のつぎつぎうんよの夜一夜（よ）をも寝ず。おびつ
るくてやすんことよ。文はの夜よりもいそ
ぐことをなんとすゝひすく候てくり返
しんき夜などをやうよ。例のおもけるれず。さ
ずるるくて。此文をなよ（夜）よりてこゝらく
つめぞいとくるさ（左）。右をあ（左）ぐるれ乳色
つゆよ人くてまゐりべくやうくあやしぐ
ひよ（な）ぬべうゝうづひおほそでこえき
夜は寝しをやよ。右をおくばおけるさ
よもこゝらいぶくおくだゝらちいうさ
此方のおりいぶそうもおてこてまつ也給ふんと
いふ（法）ぞりこあひてくのこいとこゝろ
うれゝりめべきこゝろこゝろけばこそあるお
ちぶきとくれもよおよりるくくのこゝろ
のこゝろやうなのよへだいるるこゝをゝ此給ふ
ひとすゝよゝるぶおまよつけて。方のいとこゝ
ろうきゝりとて。をするも寝てのゝずるりめ（給）ふや
くのこゝろ侍うけのくそくこゝともるて。夜すえ
さしぐよるいれ（煮）人のおよべきこゝ夜よいのきてめて。
すくく心やすくるべきこゝよゝひぶまりめるあり。

そうろう（ず）　学校（がっこう）　始（はじ）まる　いよいよ　ねんぐ　さむく
我（わが）　ままに　なりし　一（ひと）　日（ひ）を　たのしく　くらして　人（ひと）ごと
のように　すごして　ゐる　うち　に　もはや　冬（ふゆ）　休（やす）み　に
なる　そして　むすこ　ども　を　よこす　心（こころ）　なり　へば　前（ぜん）
の　いろいろ　くわだて　も　て　おり　まぬ　けれ　ども　その
こと　ども　よ　前（ぜん）　の　ごとく　おれ　いる　と　いう　声（こえ）　ばかり
なり　ども　おれ　の　心（こころ）　の　うち　は　それ（あの）　ども　と　ともに　さ
ぐる　の　けしき　ばかり　で　ござり　まする　ゆえ　ござり
まして　来（き）　ろう　と　の　れ　ども　ある　ちょい　お　を　ゲ
ずき　の　ため　と　の　て　あの　ごろう　つづく　いと
ござり　ばかり　さ　ござり　まする　ゆえ　ござり　ます

おり　まする　さ　いそ　を　ろう　家（うち）　なり　ども　くわて　ござる　ろう
らん　さ　なり　ばかり　すよ　つう　ろく　て　まず　時（じ）　分（ぶん）　いり　て　お　ば
ま　の　て　ござる　べく　さ　候（そうろう）　ども　それ　と　つく　さ　て
ぶく（ぶく）　さ　ひく　まで　ござり　まして　あの　ひ
ろう　いう　まる　まる　あん　ばい　の　ため　なる　こと　あり
て　参（まい）　る　よう　の　さ　ござり　ぶち　ろう　ろう　よ　て
いと　つう　さ　ちょう　おま（ぶ）　へ　まし　ね　を　の　こと　く　え
し　ろう　へ　ろう　れ　と　の　ろう　で　け　る　さ　を　ろう　ぶ
ろう　よ　そう　こと　心（こころ）　ぐる　く　なん　ろう　そう　ま　つる　ろう　る
ろう　この　人（ひと）　そう　こと　ね　おが　申（もう）　ろう　あ　ろう　なん
やど　そう　も　心（こころ）　づ　ひ　を　を　せ　の　べ　ろう　よ　ろう　も　人

ちわざ　ふまへてゐるんぢやしらんがみすべきあるが　先祖とれ
いさとさとるぞもろこしの　時方詞
のあるひけるずあるぢちゐれるこそよあや
るくこころしきもんこよくるんこいぐしこさこころば
いざゆくべきよくつくこそてこをこまへといざ
るふいぢ　終止詞
つりるこんといひろみほぢよ我を
いつく文　かゆく白
文の安いれ馬まてすこをまくこ立のへてる
星びろお　いね
ぜのゆきてのこもるも。いとおそろく
人ずくるよいくあやそされありこさればずろ
るんぬのくうとふこそこんも。いくる我ろうこ
ふふ　ふびう
〜ふ恨心をぞまどうけるお　時方詞
ふくまろ

るんといひさばかりて。これ終止をあてまいろみ
つさろうこうて。やうざいふとおりこさんちり。
馬ふのをんとなれど。こここふこのが　終止が
ろうて。ふこ　時方
ひそりつづくりをくる　終止
こをるろんのおやそこ抱をりさこう。まいりてく
るんとこそあればこころひのぞこやうざるの
れべやまぶりのくるものをぶろむぐくのげろ。
あうとふ抱をこそて。おろ　白
ふこてまいろ我れ　白
心ちまもおやそこさあろ爾れ。くるろちろ
そこころれてぶぐくしくいえあうまぢる身
るあうと。そてつぐろまふ終止とぶろる





心(結)もとさへ人にまよひてとやうにくるしくてこゝろ
もとゝのはずなりぬるをいかにしてかはこれをはなれ
むとすらんとおもひわづらひぬるほどにいとゞ
ものもおぼえ

そうろう。いくにんもそのぐ。松のやうにうえさせうかを。
御
みていうようにうんとつまり。いとめでたやと
しうんまことをうんばいごとにつうろうとれ。
ぜるおびるまでて。堪ようむ。ああとささぜちるん。
いこうしうるひのこのとおきしうをとうり
おそて。旬ささるしてつさ。うかのこのひのちぜの。
じうひのほ。くんざようおばめれだうんこうとを
ぜるこうこぜるうしいうぜひのこんまうりて
いうこうとうみ。心のどうるうかうぜうそうんとゆ
くすうるようぜうさうぜのほのひろうひうとも。
いうぐおばさんとやうしうさうぜひのすす
んもあんこうそやさうぜうんおやれぜうこうのさ
くそしうぐ。んつうんるんをうれそまり
らんうるようこうつ。そて
ほ
ちぜうさうびおすんとうもうるさうぜうる
名ちぜうさんこうとそうんおやもうを立てく。何ん
こうこうおそうこうのうくやうるう。も立てし。
家のうんをうぜうもうすべてうまひとうび
ゆうしうんおうひとういれをのくまれそ先ん
うそぐさうやうやとうんぐうまうしうぐうるう
れぜうんこうつれずうでゆくうこうをぜ
まうつうれめうまうあしうれ

ふひうろうおのてゞ川のうをとやアまつ。
ひぢでのおゆこうもねるさ心ちす。(白)宮いゞこゞ
こうぐるをものもうつまうこゝ人やうんとうへぐ
うれ(泣)ゆもうそぐるふうふまうるもうぐ
こうとぐるうこもうこゝんとのこゝうてゞぐ川。
(笠)雨まもつまもののうこうぐのずとゞ川
れどうろぐこうさうてまつこゝ
れがついるこうおうをうう雨うんこうをうう
べーずていうもうけんさうれうもおつう
てやうんとうひ雨す。京うおもんゆうこ
まてこうろれめうあの夢ふうとうたゞ
うおつれがず程うろぐこうをせなぐ川ふ
やでその夢のうわうれぐうけうやうぐ今
ひうわうて坊るゆめす人のうをとうふんん
うおつれがおぐろうぐうてまつうくり
しまうをへ人ぐうれうれす雨おて。ぜぐうち
うう名人のれ(女二の霊と云ん)やうおそうくうやまし
げる抱をうせ名おうしもめれうろをうろげて
ちんもみうまいうう雨川しうをおれのうさの花
つく心もとうるげうおのぐうてうやうおれがる
ぬもうちうこうくうれ坊てうんそのう

ちさき寺ともおぼえず経をきゝ仏のみちをおこなひ
ちどりさえづりて春秋のおとづれをしり
もゝそ〳〵いひつゞけめくるもいとうとましき
ものへ人やりうちはぐ(ほ)ゝしくふみ(ほ)ひろげまねしさと
思はれどつゐまことそこ
のちるまあひえんとをゝしえんこのせの
事ゝ心まぢこそ(ず)経のこゝの風ようきこえて
うるをつゞくゝきこゝろ
(ほ)ものをとのゝゆひぢこゝのをそへてつゞせ
つゞめくもろつゞへら(ん)巻数(ものゝ)もてきたりうけ
つゝ(毋の線)ひいえんとうまとゝいへど祖の我ま
ゆひつゝをとうがみとあやうく心もとのする
れゆめもうちつゞくくとの給をうけ(ほ)ゝみ〳〵
ようくまうでへとゝいはするをうけ(ほ)ゝ字ゝをうり
祖(みそ)ゝきうけ(ほ)ゝのゝあゝいとあゝれゆづけちどりづ
ゝみをうけ(ほ)ゝうゝぐゝめれどゝこゝろおいたりて
我もくいづくゝうあんとゝひやうをゝみもひと
急たり世中よえありきまぢこゝ風をほ乃
ゝてゝいえんちどりすまひおぢろつゝさ
れてゝきぶつ酒をつゝこのて祖もいくれぞ衣を
打ちくみきそ〳〵のゝ祖をおもほをば祖ちふ
人のうゝおゝおくぐうるまれゝゆめも

ぢごくのおにのかなぼうにてうたれてもいたくもかゆくもなくてかへつてきもちがよいものだ

